

写真で見る昭和の横浜③
ムーア女史の歓迎会



歓迎会の会場となった開港記念横浜会館の講堂 1934(昭和9)年3月14日 横浜小学校文庫 横浜市史資料室所蔵

一、「青い目の人形」

一九三四（昭和九）年三月一四日、開港記念横浜会館においてミネット・B・ムーア女史の歓迎会が催され、横浜市内の児童や園児と共に、小学校や幼稚園に贈られた「青い目の人形」六三体が集められた。今回は横浜市史資料所蔵の写真資料からその歓迎会の様子を紹介したい。

一九二四（大正一三）年五月、アメリカ連邦議会において「排日移民法」が可決されると、日米の関係は悪化し、横浜でも対米問題県民大会が催されるなど反米感情が高まった（『横浜毎朝新報』一九二四年七月三日）。

そうした状況を危惧した親日家牧師のシドニー・L・ギューリック博士は実業家の渋沢栄一と図り、日本の子どもたちにアメリカから人形を贈呈することで若い世代の友情を育もうとした。それに先立ち、ギューリック博士は自らが事務局長を務める世界児童親善会を通じて人形の収集を開始、一九二六（大正一五）年の秋には全米にむけて日本への「人形計画」を発表する。それに対してアメリカの小学校や青少年団体、PTA連合会などは賛意を示し、全米から一二七三九体の人形が集まった。そして一九二七（昭和二年）一月以降、横浜港や神戸港に到着した客船から次々と「青い目の人形」が上陸、各種歓迎行事を経て、全国の小学校や幼稚園へ届けられていった。



ムーア女史(写真右側)と通訳を務めた野村洋三(写真左側)
横浜小学校文庫 横浜市史資料室所蔵

横浜市では、三月一八日に係留中の天洋丸において全米と四八州を代表する人形の授与式が行われた後、本牧尋常小学校の大講堂でそれらの人形と横浜市内の小学校に寄贈される五二体の人形の歓迎式典が挙行された（『横浜貿易新報』一九二七年三月一九日）。

人形愛好家であるムーア女史はそうした「人形計画」に尽力した一人であった。当時、東京科学博物館に飾られていた親善人形「ミス・ニュージャージー」はムーア女史が送ったもので、その人形は姪のバーバラが可愛がっていた一体だった。一九三二（昭和七年）、バーバラを亡くしたムーア女史は、形見となった人形に一目会ったため、一九三三（昭和八）年一〇月に来日、その後、約二年間に亘って日本各地の「青い目の人形」を修理して回っ

た。まさに「青い目の人形」にとってムーア女史は「母親」といふべき存在であった。

二、歓迎会の準備

一九三四年三月初旬、横浜市は横浜へやって来るムーア女史を歓迎するため、市内に所在する「青い目の人形」とムーア女史との対面会を企画する。三月七日、大西一郎横浜市長は市内の小学校長に宛て、「ムーア女史歓迎ノ件」(教発第一四八号)を発し、教員及び児童の参加と人形の持参を求めた。

横浜市史資料室所蔵『昭和八年度公文書綴 元街小学校』(元街小学校資料)から計画の概要を確認すると、各学校には、当日参加する女子児童や教員の数が指定され、元街尋常小学校では、女子児童五〇人、付添教員二人が参加することになった。また、当日の



大西一郎市長(最前列右側)と有吉忠一前市長(最前列中央)
横浜小学校文庫 横浜市史資料室所蔵

注意として以下の六点が挙げられた。

- 1、人形ハ箱ノママ持参ノコト
- 2、日本人形同伴ノコト(便宜御配慮願ヒタシ)
- 3、着衣ノ見苦シキモノハ着更ヘシムルコト(便宜和服ヲ着用セシムルモ可ナリ)
- 4、参加児童ノ服装ハ平生ノマ、ニテ可ナルモ、日米人形抱持者ハ見苦シカラヌ程度ニ留意ノコト
- 5、人形ハ十七日迄借用致度キニ付所属校(園)名ヲ適宜ノ箇所ニ明記ノコト
- 6、毀損ノ人形持参ハ遠慮セラレ度中ニ市役所ニテ受領セラレ度コト

タキコト

以上のように、「青い目の人形」の持参とともに、「日本人形の持参も小学校に求められた。写真に写る壇上右手の日本人形は各小学校や幼稚園から持参されたものであろう。

歓迎会当日の一九三四年三月一日、女子児童たちは開会三〇分前の一三時三〇分までに入場し、式典の開始を待った。開港記念横浜会館ホール正面壇上には、赤絨毯を敷いた雛壇が築かれ、その周囲は金屏風や生花で飾り付けが施された。また、会場内には日米両国の国旗が掲げられ、日米の親善を演出した。参列者は女子児童・園児の他、大西市長や村山沼一郎・大岡大三助役、「青い目の人形」を迎え



祝辞を述べる有吉忠一前市長(横浜商工会議所会頭)
横浜小学校文庫 横浜市史資料室所蔵

た一九二七年当時の市長であった有吉忠一横浜商工会議所会頭、さらにR・F・ボイス在横浜アメリカ領事などが来賓として参加した。会場は約八〇〇人の参加者で溢れかえった。

三、歓迎会の進行

一四時、「人形を迎へる歌」の合唱とともに、ムーア女史の歓迎会が始まった。壇上には英語に堪能な野村洋三商工会議所議員が立ち、ムーア女史の言葉を見守るに解るよう翻訳した。

事前に指定された各小学校・幼稚園の代表者二名はそれぞれ「青い目の人形」を抱えて登壇し、ムーア女史に手渡していった。そして人形を受け取ったムーア女史は一体一体を我が子のように愛撫しながら雛壇に並べていく。その様子を見た横浜尋常小学校の引率教員は、「七年余も経たる今、異郷にて

の再会といったやうななつかしさのあふれたる女史の表情には参列者一同が感心させられました」と、感想を残している(鈴木六郎編『学之友』第一〇三号、横浜小学校児童保護者会、一九三四年九月、横浜市史資料室所蔵)。

市内所在の「青い目の人形」六三体がすべて雛壇に揃うと、大西市長は歓迎の言葉を述べるとともに、感謝の意を示した。それに対してムーア女史は喜びの言葉と笑顔で応えた。続いて有吉前市長やボイス領事も喜びの言葉を述べ、日米の友好を相互に確認しあった。そして「アメリカ人形歓迎記念映画」が上映された後、式典は一七時に散会、児童や園児は各々の学校や幼稚園に帰って行った。

ムーア女史の歓迎会は人形を通じた日米親善を思い起こす場となった。しかし、日米の対立は中国問題を巡ってさらに深まり、「青い目の人形」は敵性人形として次々と失われていくことになる。そうした点からムーア女史の歓迎会は市内の「青い目の人形」が集合した最初で最後の機会となった。

【主要参考文献・資料】横浜人形の家編『青い目の人形にはじまる人形交流』(同、一九九一年)／武田英子「人形たちの懸け橋―日米親善人形たちの二十世紀―」(小学館、一九九八年)／五百頭真編『日米関係史』(有斐閣、二〇〇八年)／『読売新聞』・『東京朝日新聞』・『横浜貿易新報』一九三四年三月一四日付記事 (吉田律人)